

あなたはどちらの国に生きるのか？

「二つに裂けた神殿の幕」

マルコ 15:21 ~ 23 ヘブル 10:17 ~ 21

はじめ

私たちの人生というのは自分では良い事を行っているつもりでも、いつも評価をされるわけではなく、そんなつもりでは無かったのにという残念な結果になることもしばしばあります。

外側がいかに美しく評価を受けるにふさわしいものだとしても、大切なのは内側です。だからこそ私たちが持っている弱さにしっかりと目を向け、それを神様の前に捧げて委ねていくことが大切です。弱さに目を向けること、それは自分を責めることではなく、神様と共に解決をしていく人生を選ぶということです。

ゴッホが描いた絵は 2000 点もの作品がありましたが、彼が生きているうちに売れた絵はたったの一枚で日本円にすると 4 万円です。今では彼の描いた絵には何億もの価値があります。このように生きている内は評価を受けませんが、今となってはゴッホの生き方と彼が描いた絵は、高く評価をされています。

イエス・キリストも誰からも評価をされませんでした。十字架の上でさえ「自分を救えないのか。」とあざげられ、彼の存在にみんなは首を振りしましたが、今では、世界の人類の半分はイエスキリストを信じていて礼拝を捧げています。主イエスキリストと歩み、彼の人生を引き継ぐなら、歴史を書き継いでいくことができます。

幕が真っ二つに裂ける

イエス・キリストが息を引き取った時、至聖所にあった神殿の幕は上から真っ二つに裂けました。当時、至聖所には清く罪を犯さない大祭司だけが行くことができました。その大祭司として選ばれる者は、全世界の中で神を礼拝することがゆるぎされていたユダヤ人のレビ人のある種族の中の一人だけで、1/70 億の確率です。この、大祭司カヤバがイエス・キリストを十字架につけたのです。カヤバは幕が真っ二つに裂ける悲劇を見て自分がしたことを後悔しましたが、しかしまた神殿を建ててしまう罪を繰り返してしまったのです。

当時、どのように礼拝をしていたのかというと、清い祭司は神の近くにいましたが、罪を繰り返してしまう民はバビロン捕囚に合いました。大祭司は礼拝し民の罪のゆるしを乞い、赦されると無事に神殿から出て行くことができました。しかし民が繰り返し犯す罪のため、遂には至聖所で礼拝を捧げることができなくなり、栄光がさっていきました。ネヘミヤの時代に再び神殿を再建しましたが、そこにはまだ栄光はありませんでした。それゆえ、幕屋の中は光が無い状態であったため、至聖所と燭台があった部屋を分けていた、皮でつくられた 18 メートルもの壁を少しずらして、人工的にろうそくの光が漏れるようにしました。神の栄光ではなく、人があたかも栄光があるようにした細工でした。そのような中で、イエス・キリストは、本当の光として来られたのです。最初はそのことを信じ、ローマの征圧から解放されること、戦に勝利することを心待ちにしていた祭司にとって、自分たちの思い通りにならないこと、それだけでなく自分たちの行いに対して指摘をされるうちに殺意が出てきてしまいました。自分の思う通りにならないと、たとえ正しくても真実であっても、嫌なのです。全人類の代表であった大祭司は年に一回与えられている許す機会にバラバを選び、イエスキリストを十字架につけてしまったのです。大祭司は間違いだらけの決断を繰り返してしまいました。なぜなら人はこのように、頑なになり続けていき、自分の罪を見ないようにしてしまったからです。

罪が分からないことが罪です

罪の代表は、罪が分からないことが罪です。大祭司は罪がわかりませんでした。むしろ自分が正しいと思っていたのです。自分が正しいと思った時点で裁き目線になり、正義を振りかざすことになります。そこには、相手への理解がありません。正義というのは神様が神様としてなされることです。神の真実と義は絶えず神の内に輝き、それ以外はすべて不義です。正義は、私たちが神様を見る時に自分の不義を感じる為にあります。それなのにも関わらず、私たちは神様を見るための正義を、自分の

罪が分からないので、隣人に正義を見ようとし、自分に正義があるかのように裁いてしまいます。正義は、神様と自分の間だけにあり、それは自分の不義や弱さを知るためだけにのみあるのです。

ヘブル 4:15

「私たちの弱さに同情できない方ではありません。」と書かれています。イエス・キリストは、私たちの罪を理解してくださったのです。私たちは自分の罪がわかる時理解することができ、「Understand」に立つことができるのです。

イエスは、「あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、みなに仕える者になりなさい。」と言われました。ここに書かれている「仕える」とはどういうことでしょうか。それは、イエス・キリストがこの地上に来られた理由、それは仕えること＝「理解する」ということです。しかし理解するということはそれだけ終わるのではありません。理解されて初めて慰められ、罪に気付くことができるのです。それは、子どもが喧嘩をして母親に泣きついて抱きしめられ慰められ、そして初めて自分の悪かった事を告白する様子に似ています。

最初に十字架があったのは、私たちが慰められるためです。慰めは、わたしたちの人生の隔ての壁を真っ二つに裂きました。それが十字架です。

光

私たちの心の中にある、自分では切ることのできない 10 センチもの分厚い壁。その先には決して誰にも開かれない真っ暗な部屋があり、そこには罪が隠されています。

その暗闇は、神様の約束と恵みとルールがなければ、そこに光が輝くことはありません。

神様は人工的な光で、なんとなく輝かせたいわけではありません。私たちの心の中にある本当の光を輝かせたいのです。光をもたす為、神様は幕やの壁を上から下まで切り裂きました。このことは罪を認めようとする者にとっては喜びとなり、隠そうとする者にとっては悲劇です。聖書にこう書いてあります。「見よ。主の御手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて、聞こえないのではない。あなたがたの咎が、あなたがた、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。」(イザヤ書 59 章 1-2 節) 私たちは変わらなくてははいけません。その方法は、神様に至聖所に戻ってもらうことです。十字架の上で、イエス・キリストは「我が霊を御手に委ねます。」と言われなくなりました。その死を確かめるために、兵士がわき腹を槍で刺すと水と血が噴き出しました。「水と御霊でバプテスマを受けなければならない。」という旧約聖書で預言されていたことが成就した瞬間でした。また、大祭司が神殿に戻ると、神殿は崩壊していました。神殿の幕が落ちているのを見て、大祭司は後悔をしました。自分の罪を見ようとしなかったので変わることはありませんでした。

さいごに

罪がわかり理解すること、それは分かってあげようとする事です。自分の罪が赦されていることが分かった人は、人を裁くことをやめます。相手の立場を理解しようとするのです。私達はいつもそのことをしなくてははいけません。正義を振りかざす人であってははいけません。正義を振りかざした瞬間、関係は絶たれます。絶たれたのなら、和解するように関わらなくてははいけません。イエス様がそうされたからです。そして、罪が分かった私たちがしなくてははいけないのは、赦されたように相手を理解することです。自分が許すのではなく、赦して下さる神様の元に、一緒に行くのです。神様は私たちの人生にそのことを成そうとして下さっています。

(要約者:富岡 牧)

(2023年 4月 30日)